十三講詣り
福満虚空藏菩薩圓藏寺では小学校六年生でお詣りをします。

十三講詣りとは古来より、数え年十三歳に成長した男女が、成人の儀礼として虚空藏菩薩圓藏寺へ参拝しておりました。十三歳の厄難を払い、知恵を授けていただけるように祈願いたします。

明治末期までは会津一円で広く行われていた行事で、十三歳になった子どもは新調した衣装を着て親と共に陰暦三月十三日(現在の四月十三日)の虚空藏菩薩の縁日にまいり、名物の「あわまんじゅう」を食べ、魚淵のうぐいを見て帰るのが習わしでした。

大正時代には小学校六年生の遠足は柳津と決められ、学生全員で十三講詣りをしたものでした。

こうした風習は現在にも受け継がれており、数え年十三才になると今も柳津へ昔と同じように正装でお参りをする姿を数多く見られます。

開運撫牛

八重たん

柳津マスコットキャラクター
うとちゃん

その由来

弘法大師が広めた虚空藏菩薩信仰は、その霊験あらたかな事を持って庶民に広がりました。

一代守り本尊としては丑、寅の年に生まれた人々の守り本尊で縁日が十三日となっています。この十三日の縁日にあやかって「十三講詣り」の庶民信仰が普及したものといわれています。

六年生以外の十三講詣りご祈祷は受け付けておりません

新島八重と虚空藏菩薩

新島八重の遺品の中に二十二枚の絵葉書があり、そのうちの二枚に圓藏寺の絵葉書がありました。裏面には八重の直筆で「こくぞう」と書かれており、はるばる会津の城下からこの柳津の虚空藏菩薩へ詣で、信仰していた貴重な写真であり、八重ゆかりの地であることを裏付けるものです。

赤べこ発祥の伝説

今から四〇〇年ほど前の一六一一年に会津地方を襲った大地震でここ柳津も大被害を受け虚空藏菩薩をはじめ僧舎・民家が倒壊し多くの死者がでました。

その後の一六一七年に初めて虚空藏堂(本堂)は現在の巌上に建てられのです。本堂再建に使われた木材は、只見川上流の村々からの寄進を受け、只見川を利用して運ばれましたが、ここから巌上に運ぶのに大変困り果てていたところ、仏のお導きか、どこからともなく力強そうな赤毛の牛の群れが現れ、大材運搬に苦労していた黒毛の牛を助け、見事虚空藏堂を建てることができたのです。

赤毛の牛の群れはなぜか虚空藏堂の完成を待たずにいずこえともなく姿を消したと言われ、後に大材を運んでくれた牛に感謝の気持ちと、ねぎらいをこめて建立されたのが開運「撫牛」であり、一生懸命手伝った赤毛の牛を「赤べこ」と呼び忍耐と力強さが伝わり、さらには福を運ぶ赤べことして多くの人々に親しまれるようになりました。

これが当地柳津が「赤べこ発祥の地」と言われる由縁です。

明治初期の圓藏寺の絵ハガキ
(同志社社史資料センター所蔵)